都道府県別賞一等

私が考えた保険

山形県　山形市立第四中学校　三学年　海藤　美羽

私が生命保険についての作文を書くとなると、すぐに書けるような思い当たることが一つあります。

私が中学一年生のとき、柔道部に入部したばかりの出来事でした。柔道で豪快な技をかけられ、私の体が宙に浮きました。柔道では技をかけられたとき、受け身という動作のおかげでケガをせずに済むのです。しかし、あのとき私は受け身をとりそこねてしまい、右足の足首を骨折してしまいました。大会に向けて柔道を頑張っていた矢先のケガでした。私は足の骨折を早く治すために手術をしなければなりませんでした。病院で手術を受けるには多くのお金が必要です。手術を受けるのはもちろん、入院するための部屋、入院中に食べるご飯、手術を受けてから回復するために行うリハビリ、そして、退院してから定期的に受ける検診、今私が考えただけでも色々な場面でお金がかかることが分かります。しかし、この作文にあるテーマの「保険」のおかげで私の手術によるお金の負担は減りました。学校でのケガが認められ、「災害共済給付制度」から給付金が支払われたのです。「災害共済給付制度」という長い漢字の制度の名前を書いてみたものの、一年生のときにあった出来事を三年生になった私がふと思い出して調べて書いたものなので、足を骨折していた一年生の私には保険について知るよしもありませんでした。私の右足のケガはリハビリや友達の助けがあり回復し、手術痕が残るものの今は全国大会に向けて柔道の練習をがんばっています。一年生のとき、ケガをしたときに給付金をもらったことや、今こうして「保険」について作文を書いて三年生の私は考えたことがあります。一年生のころの私は、入院や手術の大切な書類などはほぼ親が書いてくれていました。それはもちろん、私はまだ中学生になったばかりなので書くことができません。お金のことも同じです。私は働いてお金をかせぐことはもちろんできないので、手術や入院にかかるお金は親のかせいだお金で払っていたと思います。しかし、いつまでも親のもとで生きていくわけにはいかないので、私は大人になると一人で何か仕事を見つけて働かなければなりません。お金をかせいでご飯を食べていかなければなりません。健康に過ごすことができればよいですが、そう簡単にはいきません。ケガや病気で入院し、仕事ができなくなるかもしれません。柔道で足を骨折して練習ができなくなった私のように。私が大人になって入院しても、私の代わりに手術や入院するためのお金を払ってくれる人や私の代わりに働いてお金をかせいでくれる

人はいません。万が一のときも自分でどうにかしなければならないときがくると思います。『転ばぬ先の杖』ということわざがあります。前もって用心していれば失敗することがないというたとえです。もしものとき、転んでケガをしてしまったら大変です。「保険」はそうならないための杖、分かりやすくするとすべり止めのくつ、転んでも痛くないクッションだと思います。

私はまだ中学三年生で親のもとで生活しています。まだ生命保険に関わることはできないと思っていました。しかし、この作文を書いて、書くために調べて考えたことは忘れません。将来、転ばないように使う杖のことをもっと考えなければなりません。私が将来、どんなことをして生きていくのかは分からないけれど、もしもに備えて夢を叶える方法は分かったような気がしました。